

『武家の古都・鎌倉』塾 第3回

講義「谷戸の寺院と庭園」

2007.10.13(土) 9:30-12:00 鎌倉生涯学習センター

谷戸を開発して行われた寺院の造営は鎌倉に特異な谷戸景観を生み やぐらや禅宗庭園などの新たな武家文化を創出しました

◎ 講義要旨

講義の第2回目は「谷戸の開発と庭園—鎌倉の原風景—」と題してお話をさせていただきました。

1. 谷戸の開発

武士は土地に根ざした領主であり、自分の館の周辺の谷戸を耕地に開発していました。鎌倉を本拠として政権を開いた武士は、自らに与えられた谷戸を開発して館や寺院を造営しました。源頼朝が奥州攻めの戦死者供養のために建立した永福寺(跡)は谷戸の微高地を造成していますが、谷戸の造成が本格化するのは13世紀中頃からで、建長寺の造営が大きな転機になっているようです。建長寺は我が国最初の禅宗の専門道場で、初めて谷戸の大規模な造成を行いました。当時の中国の大禅宗寺院は山岳寺院であり、尾根を造成して伽藍を造っていましたが、鎌倉では稜線の狭い急峻な山稜であるといった土地の特性によって谷戸を大規模に造成して伽藍を造りました。このため谷戸には造成によって造られた垂直の崖である切岸が見られ、切岸を背景とする谷戸の景観は鎌倉の独特の景観となっています。建長寺は細長い谷戸を敷地として造成したため、細長い一直線の伽藍配置となり、これは日本禅宗寺院の伽藍配置の基準となりました。これに続き円覚寺が建立されますが、建長寺が主要な堂を一面の平地に建てているのに対し、^{ひな}雛壇状の敷地を造成し、堂を建てています。こうした二つの敷地造成法は覚園寺と浄光明寺など他の寺院でも認められるものです。寺院の敷地造成に当たり岩山を開削して造成したことは寿福寺に蔵六庵を造営した際の中国人禅僧大休正念の



称名寺庭園(横浜市金沢区)

偈にも示されています。谷戸造成は武士による鎌倉独特の土地利用を示しています。

2. やぐら

やぐらは鎌倉を中心に造られた石窟です。13世紀末頃から16世紀頃まで営まれ、中国石窟寺院の影響を受けて成立したとされています。五輪塔や宝篋印塔などの石塔が安置され、主に火葬骨が納められる墳墓堂でした。



瑞泉寺庭園内のやぐら

やぐらは石窟文化の東限における特異な発展形態であり、武士の宗教観を示す貴重な遺産です。

3. 鎌倉の庭園

鎌倉の庭園は永福寺から始まります。源頼朝は永福寺において、平泉で造られていた浄土を表す庭園(浄土庭園)を鎌倉に導入しました。称名寺庭園(横浜市金沢区)はその一例です。こうした前提の下に、鎌倉では禅宗寺院に独自の庭園が創出されます。中国の大禅宗寺院では方丈裏には庭園は存在しませんでした。鎌倉では谷戸の造成を行って敷地を造成したため、治水の必要から伽藍の最奥にある方丈の奥には池が造られていました。この池は雨水などの調整と方丈への来客をもてなす庭園、さらに禅宗寺院内の境致である景観美の表現を併せ持ったものです。瑞泉寺庭園はそれを独自に発展させ、岩盤を掘り込んだ独自の景観を創出しています。こうして成立した禅宗寺院の庭園は夢窓疎石により禅の修業、またその発露と位置づけられ、日本庭園の発展に重要な役割を果たしました。

谷戸を開発して行われた寺院の造営は鎌倉に特異な谷戸景観を創出し、やぐらの造営や禅宗庭園の創出など、新たな文化的発展を導き出しました。

(鎌倉市世界遺産登録推進担当 玉林美男)